Graduate School of Pharmaceutical Sciences
Faculty of Pharmaceutical Sciences

東京大学大学院薬学系研究科・薬学部

概　要

2015

目　　次

１．沿　　革
　１）沿革概要 …… 1
　２）年　　譜 …… 6
２．組　　織
　１）名称及び所在地 …… 7
　２）組　　織 …… 7
３．教 職 員
　１）役職員 …… 8
　２）教職員数 …… 8
　３）専門分野別教員一覧 …… 8
４．学　　生
　１）定員及び現員 …… 9
　２）外国人留学生 …… 9
　３）研究生等入学・受入れ状況 …… 9
　４）就職・進学の状況 …… 10
　５）博士学位授与数 …… 10
　６）奨学生 …… 11
　　①　日本学生支援機構
　　②　その他奨学生
５．施設設備等
　１）土　地 …… 12
　２）建　物 …… 12
　３）設備等 …… 13
　　①　図書及び学術雑誌
　　②　標　本
６．財　　政 …… 14
７．専門分野別主要研究テーマ …… 15
８．配 置 図
　１）本郷構内配置図 …… 20
　２）薬学部校舎及び諸施設配置図 …… 21
９．附属薬用植物園 …… 22

表紙のロゴマークについて

薬学部30周年記念ネクタイピンのデザインから
イチョウの部分のみを抜き出して使用している。

〔30周年記念ネクタイピンのデザインについて〕
　意匠：廣部雅昭 名誉教授（元薬品代謝化学教室教授）
○薬学部章“Φ”を東大のシンボル：イチョウの葉２枚でデザインした。
○1873　東大薬学部の起源（明治６年）
　1958　東大薬学部独立（昭和33年）
　1988　東大薬学部30周年（昭和63年）
　それぞれを目立たない数字で模様のようにアレンジした。
○イチョウの葉の軸の部分は“∞”を形どり、無限の可能性、“薬学部は永遠なり”を意味している。

1．沿　革

1）沿革概要

東京大学大学院薬学系研究科の源流は、明治６年（1873）文部省布達により東京神田和泉町の医学校に製薬教場が設置されたことに始まる。明治10年（1877）東京大学創立に伴い、製薬学科となり、同20年（1887）医科大学薬学科に改組された。発足当初、ドイツ人ミュルレル氏らの勧告によって、医師が患者に投薬する日本古来の医療慣習の危険性、粗悪薬品の輸入防止などへの対策として薬学研究教育の重要性が指摘されたことが契機となったこともあり、医学と薬学の緊密性をうたったドイツ式教育がその中心となった。明治７年ドイツ留学から帰朝した柴田承桂氏が初代教授となり外国人教師が加わり、明治11年最初の卒業生として９名の製薬士を送り出した。医科大学薬学科に改組された後は、第１回製薬士下山順一郎、丹波敬三の両教授と丹羽籐吉郎助教授の担任で開講され、明治23年薬学科第１回卒業生として５名に薬学士の称号が授与された。

明治26年（1893）薬学科に生薬学（下山順一郎）、衛生裁判化学（丹波敬三）、薬化学（長井長義）の３講座が、設置されるとともに、同39年最新式の赤煉瓦の薬学本館が完成、同40年に増設された薬品製造学講座（丹羽籐吉郎）を加えて名実ともに近代薬学教育研究体制がスタートした。大正８年（1919）の学制改革により医学部薬学科となり、昭和５年（1930）臓器薬品化学（昭和29年生理化学と改称）、昭和17年（1942）薬品分析化学の２講座が新設された。その間関東大震災、第二次世界大戦の苦難の道を乗り越えながら、薬学研究教育の使命を果たしてきた。当初薬学研究の主力は製薬学、とくに草根木皮よりの薬効成分の単離、構造決定、合成研究が活発に行われた結果、長井長義のエフェドリンの発見を始めとする高水準の天然物有機化学、合成有機化学が東大薬学に開花し、その後の研究の主流をなして来た。

昭和24年新制大学として再編成された医学部薬学科は教科目の充実をはかるべく、製剤学、薬品作用学の２講座を新設、８講座体制が敷かれたが、さらに総合科学性の極めて高い薬学の本質に鑑み、有機化学に加えて基礎学として生物化学、物理化学系の充実強化をもはかるべく、その機が熟した昭和33年（1958）、80余年の来歴に終止符をうち、医学部より独立、東大薬学部が誕生した。学部独立により薬学科、製薬化学科の２学科制をとるとともに、学生定員も35名から70名へと倍増、さらに新館建築、諸施設整備がはかられた。講座も薬品製造工学（1960）、微生物薬品化学（1961）、薬品物理化学（1961）、薬品合成化学（1963）、薬品物理分析学（1967）が、さらに薬害をめぐる社会的要請にもとづき薬害研究施設（1966）が相次いで設置された。さらに昭和48年（1973）には現在の千葉市花見川区畑町に薬用植物園が設けられた。

このように学部独立によって、薬学の使命である秀れた医薬の創製と医療への応用を目指すバランスのとれた基礎研究・教育体制が敷かれたが、さらに近年における学問・技術の急速な進歩、高度化に対応して、大学院教育の充実強化による秀れた人材の育成をはかるべく、昭和51年（1976）従来の２専門課程に加えて、大学院生命薬学専門課程を増設、薬害研究施設の２部門、毒性薬理学（1966）生体異物･免疫化学（1971）および新設の薬品代謝化学（1976）の３講座を基幹講座としてスタートした。これに伴い前記施設は発展的に解消した。さらに平成６年度進学生より学部定員を80名に増加し、また講座も２寄付講座、医薬分子設計学（1990－1995）、機能病態学（1992－1996）に加え薬品分子機能学講座（1992）が、生命薬学専攻課程に相関医薬化学講座（1994）が新設された。また平成８年度に教育の多様化と統合化を図るため、既存の２学科を統合し、薬学科１学科に改組した。さらに柔軟な教育研究体制の確立のため、既存の小講座を５つの大講座に改組し、医療薬学講座に臨床薬学専門分野を新設したことにより、近年の薬学領域の進歩、拡大に対応すべく研究・教育体制の充実が図られた。

その後、平成９年度には、大学院重点化により薬学部は大学院薬学系研究科・薬学部として整備充実が図られ、大学院学生定員の大幅増と専攻の再編により分子薬学・機能薬学・生命薬学の３専攻体制となった。また、平成13年度には重要な疾患の治療薬のシーズを大学院薬学系研究科の総力を結集して探索することを目的に創薬理論科学寄付講座（2001―2007）を設立、さらに、新規医薬の経済学的評価法に関する学問を発展させることを目的とした医薬経済学寄付講座（2001－2006）を設立した。平成14年度には大学と社会との産学連携を推進し、実りある価値を創造する

ための「新しい仕組み」を開発・提案することを目的としたファーマコビジネス・イノベーション寄付講座（2002－2007）を設立（2012 年に設置更新)、さらに平成15年度には、日本のトップレベルの製薬企業との連携により真のサイエンスとしての創薬科学を建設し、日本発の優れた医薬品シーズを発見することを目的とした創薬科学連携客員講座が新設された。平成16年３月に、薬学系総合研究棟（Ⅰ期）が竣工、民間からの寄付金によるⅡ期分と併せ、平成18年２月に完成した。平成16年４月には医薬品の有効性と安全性を的確に評価する科学を開発、体系化し、体得する教育を提供することを目的とした医薬品評価科学講座が総長裁量により新設された。また、平成16年度には塩野義製薬との共同研究契約をもとに新たに産学連携共同研究室が設置された。同年10月には医薬品情報に関する方法論の開発、実践などを目的とする医薬品情報学寄付講座（2004－2009）が新設された（2009年に設置更新)。平成 18 年４月にジェネリック医薬品の現状分析や高価な医薬品の経済分析などを目的とした医薬政策学（東和薬品）寄付講座（2006－2011）が新設された（2011年に設置更新)。

他方、平成 18 年４月には、近年の高度医療に対応し、かつ臨床現場に即した薬剤師教育を行うことが必要との認識から、学校教育法、薬剤師法が改正され、従来の薬学科を廃止して、薬科学科（４年制課程）と薬学科（６年制課程）を設置した。平成 19 年４月には、創薬理論科学寄付講座をさらに発展、充実させるべく新たにアステラス創薬理論科学寄付講座が開設された。平成 20 年４月には、専攻の再編により統合薬学専攻を新設、従来の３専攻に加え４専攻体制となった。さらに、平成 22 年４月には、大学院修士課程にこれら４専攻を統合して新たに薬科学専攻を設置した。この平成 24 年４月には、大学院博士後期課程（３年制課程）に４専攻を統合して薬科学専攻を、また薬学博士課程（４年制課程）を設置した。平成 24 年６月には、新しい薬学教育課程（特に６年制薬学科、薬学専攻博士課程）における教育・研究体制の充実を目指して、医療薬学高度教育開発センターを設置した。また、同年 10 月には、物質の分泌と取り込みの輸送を司る細胞小器官エンドソームに着目し、その物流制御分子基盤と破綻による疾患の同定を目的とした疾患細胞生物学寄附講座（2012－2017）が新設された。平成 25 年 10 月には、未だ有効な治療法が無い国民病・難治疾患治療のための創薬シーズの発見、疾患診断技術開発による予防医療の推進を図ることを目的としたワンストップ創薬共用ファシリティセンターが文部科学省「先端研究基盤共用・プラットフォーム形成事業」の支援の下に設置された。平成 26 年４月には、医療薬学高度教育開発センターが教育組織として６年制薬学科教育課程の更なる充実のため医療薬学教育センターと改称された。平成 27 年４月には、医薬品情報学寄付講座をさらに発展、充実させるべく新たに育薬学寄付講座（2015－2020）が設置された。

歴代学部長

石館守三（昭33. 4. 1〜昭35. 3. 31）
伊藤四十二（昭35. 4. 1〜昭39. 3. 31）
野上　壽（昭39. 4. 1〜昭43. 3. 31）
山田俊一（昭43. 4. 1〜昭43. 11. 4）
柴田兼二（昭43. 11. 5〜昭45. 11. 4）
浮田忠之進（昭45. 11. 5〜昭47. 4. 25）
水野傳一（昭47. 4. 25〜昭47. 5. 24）（事務取扱）
管　孝男（昭47. 5. 25〜昭49. 5. 24）
高木敬次郎（昭49. 5. 25〜昭50. 3. 31）
滝澤武夫（昭50. 4. 1〜昭51. 3. 31）
水野傳一（昭51. 4. 1〜昭54. 3. 31）
野島庄七（昭54. 4. 1〜昭56. 3. 31）
山田正篤（昭56. 4. 1〜昭58. 3. 31）
粕谷　豊（昭58. 4. 1〜昭60. 3. 31）
福田英臣（昭60. 4. 1〜昭62. 3. 31）
花野　学（昭62. 4. 1〜平元. 3. 31）
大澤利昭（平元. 4. 1〜平 2. 3. 31）
中嶋暉躬（平 2. 4. 1〜平 4. 3. 31）
廣部雅昭（平 4. 4. 1〜平 6. 3. 31）
古賀憲司（平 6. 4. 1〜平 8. 3. 31）
名取俊二（平 8. 4. 1〜平10. 3. 31）
井上圭三（平10. 4. 1〜平11. 3. 31）
今井一洋（平11. 4. 1〜平13. 3. 31）
桐野　豊（平13. 4. 1〜平16. 3. 31）
海老塚　豊（平16. 4. 1〜平18. 3. 31）
柴﨑正勝（平18. 4. 1〜平20. 3. 31）
杉山雄一（平20. 4. 1〜平22. 3. 31）
長野哲雄（平22. 4. 1〜平24. 3. 31）
堅田利明（平24. 4. 1〜平26. 3. 31）
嶋田一夫（平26. 4. 1〜　）

各専門分野教授の変遷
（明治26年＝1893年講座制定以降現在に至る）

有機薬科学講座

薬化学教室（旧薬化学講座）

明26	大10	教授	長井長義
大10	昭12	教授	近藤平三郎
昭13	昭34	教授	落合英二
昭34	昭58	教授	岡本敏彦
昭58	平 9	教授	首藤紘一
平 9	平12	教授（併）	首藤紘一
平13		教授	大和田智彦

有機反応化学教室（旧薬品製造化学講座（昭35薬品製造学講座を改称））

明40	大11	教授	丹羽簾吉郎
大11	昭12	教授	慶松勝左衛門
昭12	昭34	教授	菅澤重彦
昭34	昭51	教授	山田俊一
昭51	平10	教授	古賀憲司
平10	平19	教授	小林　修
平19		教授	井上将行

有機合成化学教室（旧薬品合成化学講座（昭38植物薬品化学講座を改称））

昭39	昭52	教授	滝澤武夫
昭52	平 3	教授	大野雅二
平 3	平22	教授	柴﨑正勝
平22		教授	金井　求

天然物合成化学教室（旧相関医薬化学講座）

平 7	平24	教授	福山　透

天然物化学教室（旧生薬学・植物化学講座（昭38生薬学講座を改称））

明26	明45	教授	下山順一郎
大元	大 7	助教授	朝比奈泰彦
大 7	昭16	教授	朝比奈泰彦
昭16	昭19	教授	藤田直市
昭20	昭23	教授	浅野三千三
昭24	昭25	助教授	柴田兼二
昭25	昭51	教授	柴田兼二
昭51	平 7	教授	三川　潮
平 7	平21	教授	海老塚　豊
平21		教授	阿部郁朗

基礎有機化学教室

平22		教授	内山真伸

物理薬科学講座

生体分析化学教室（旧薬品分析化学講座）

昭17	昭36	教授	石舘守三
昭36	昭52	教授	田村善藏
昭52	昭58	教授（併）	田村善藏
昭58	平 5	教授	中嶋暉躬
平 5	平15	教授	今井一洋
平16		教授	船津高志

神経生物物理学教室（旧薬品製造工学講座）

昭35	昭51	教授	管　孝男
昭51	昭52	教授（併）	清水　博
昭52	平 5	教授	清水　博
平 5	平17	教授	桐野　豊
平17	平18	教授（兼）	桐野　豊
平19		教授（兼）	松木則夫

生命物理化学教室（旧薬品物理化学講座）

昭36	昭61	教授	坪井正道
昭61	平 6	教授	荒田洋治
平 6		教授	嶋田一夫

生物薬科学講座

衛生化学教室（旧衛生化学・裁判化学講座（昭38衛生裁判化学講座を改称））

明26	大 7	教授	丹波敬三
大 7	大10	教授	近藤平三郎
大10	大13	助教授	服部健三
大13	昭17	教授	服部健三
昭17	昭32	教授	秋谷七郎

昭32 ― 昭47　教授　浮田忠之進
昭47 ― 昭48　教授　梶　昭
昭48 ― 昭49　教授（併）　大澤利昭
昭49 ― 昭50　教授（併）　野島庄七
昭50 ― 昭60　教授　野島庄七
昭60 ― 平12　教授　井上圭三
平12 ―　教授　新井洋由

生理化学教室（旧生理化学講座（昭29臓器薬品化学講座を改称））
昭５ ― 昭23　教授　緒方　章
昭23 ― 昭44　教授　伊藤四十二
昭44 ― 昭61　教授　山田正篤
昭61 ― 平５　教授　宇井理生
平５ ―　教授　堅田利明

生体異物学教室（旧生体異物・免疫化学講座（昭51附属薬害研究施設生体異物研究部門転換））
昭46 ― 平３　教授　大澤利昭
平３ ― 平25　教授　入村達郎
平25　准教授　東　伸昭
平25 ― 平26　教授　後藤由季子

分子生物学教室
平26 ―　教授　後藤由季子

遺伝学教室（旧薬品分子機能学講座）
平５ ― 平６　教授　長野晃三
平８ ― 平12　教授　武藤　誠
平12 ― 平13　教授（併）　武藤　誠
平15 ―　教授　三浦正幸

薬効安全性学教室（旧毒性薬理学講座（昭51附属薬害研究施設薬害作用部門転換））
昭41 ― 昭51　教授　粕谷　豊
昭51 ― 平元　教授　福田英臣
平元 一 平13　教授　長尾　拓

細胞情報学教室
平14 ―　教授　一條秀憲

蛋白質代謝学教室
平19 ―　教授　村田茂穂

創薬学講座
薬品代謝化学教室（旧薬品代謝化学講座）
昭51 ― 平８　教授　廣部雅昭
平８ ― 平25　教授　長野哲雄
平25 ― 平26　准教授　花岡健二郎
平26 ―　教授　浦野泰照

蛋白構造生物学教室（旧薬品物理分析学講座）
昭42 ― 昭63　教授　飯高洋一
昭63 ― 平22　教授　佐藤能雅
平22 ―　教授　清水敏之

微生物薬品化学教室（旧発生細胞化学教室（旧微生物薬品化学講座））
昭36 ― 昭55　教授　水野傅一
昭55 ― 平11　教授　名取俊二
平11 ―　教授　関水和久

細胞生化学教室
平９ ― 平11　助教授　山本一夫

医療薬学講座
分子薬物動態学教室（旧製剤設計学講座（製剤学講座を改称））
昭26 ― 昭46　教授　野上　壽
昭46 ― 平３　教授　花野　学
平３ ― 平24　教授　杉山雄一
平20 ― 平22　特任教授　池田敏彦
平24 ―　教授　楠原洋之

薬品作用学教室（旧薬品作用学講座）
昭30 ― 昭32　教授　熊谷　洋
昭32 ― 昭51　教授　高木敬次郎
昭51 ― 昭61　教授　粕谷　豊
昭61 ― 平９　教授　齋藤　洋
平９ ― 平26　教授　松木則夫
平26 ―　教授　池谷裕二

機能病態学教室（臨床薬学教室を改称）
平８ ― 平10　助教授　岩坪　威
平10 ― 平26　教授　岩坪　威
平26 ―　教授　富田泰輔

臨床分子解析学教室
平19 ― 平26　准教授　三田智文
平26 ― 平27　特任教授(兼)　三田智文

社会薬学講座
医薬品評価科学教室
平17 ― 平24　教授（兼）　杉山雄一
平18 ―　客員教授　藤原康弘
平24 ― 平26　教授（兼）　松木則夫

〔連携客員講座〕
創薬科学
平15 ― 平20　客員教授　柳澤宏明
平15 ― 平20　客員教授　小池博之
平19 ― 平22　客員教授（兼）　山西嘉晴
平20 ― 平27　客員教授　世永雅弘

〔産学連携共同研究室（塩野義）〕
平17 ― 平18　客員教授　勝浦五郎
平21 ― 平25　客員教授　吉岡　健
平25 ― 平26　客員教授　中野　亨

〔産学連携共同研究室（エーザイ）〕
平18 ― 平22　客員教授　山西嘉晴

〔附属施設〕

附属薬用植物園

昭48	― 昭51	園長（併）	柴田兼二
昭51	― 昭58	園長（併）	岡本敏彦
昭58	― 昭60	園長（併）	粕谷豊
昭60	― 昭62	園長（併）	福田英臣
昭62	― 平元	園長（併）	花野学
平元	― 平2	園長（併）	大澤利昭
平2	― 平4	園長（併）	中嶋暉躬
平4	― 平6	園長（併）	廣部雅昭
平6	― 平8	園長（併）	古賀憲司
平8	― 平10	園長（併）	名取俊二
平10	― 平11	園長（併）	井上圭三
平11	― 平13	園長（併）	今井一洋
平13	― 平16	園長（併）	桐野豊
平16	― 平18	園長（併）	海老塚豊
平18	― 平20	園長（併）	柴﨑正勝
平20	― 平22	園長（併）	杉山雄一
平22	― 平24	園長（併）	長野哲雄
平24	― 平26	園長（併）	堅田利明
平26	―	園長（併）	嶋田一夫

〔寄付講座〕

医薬分子設計学

平2	― 平6	客員助教授	板井昭子
平6	― 平7	客員教授	板井昭子

機能病態学

平4	― 平8	客員助教授	岩坪威

創薬理論科学

平13	― 平14	客員教授	藤野政彦
平13	― 平14	客員助教授	夏苅英昭
平14	― 平18	客員教授	夏苅英昭
平18	― 平19	客員教授	白石充

医薬経済学

平13	― 平18	客員教授	津谷喜一郎
平13	― 平18	客員助教授	福田敬

ファーマコビジネス・イノベーション

平14	―	特任教授	木村廣道
平14	― 平16	客員助教授	各務茂夫
平17	― 平19	客員助教授	田仲昭子
平19	― 平20	特任准教授	星作男

医薬品情報学

平16	― 平27	特任教授	澤田康文
平17	― 平21	特任准教授	大谷壽一
平21	― 平27	特任准教授	堀里子

医薬政策学

平18	― 平27	特任教授	津谷喜一郎
平18	― 平19	客員助教授	福田敬
平27	―	客員教授	津谷喜一郎

アステラス創薬理論科学

平19	― 平24	客員教授	竹中登一
平19	― 平24	特任教授	磯貝隆夫

疾患細胞生物学

平24	―	教授（兼）	新井洋由
平24	―	特任准教授	田口友彦

育薬学

平27	―	特任教授	澤田康文

２）年　譜

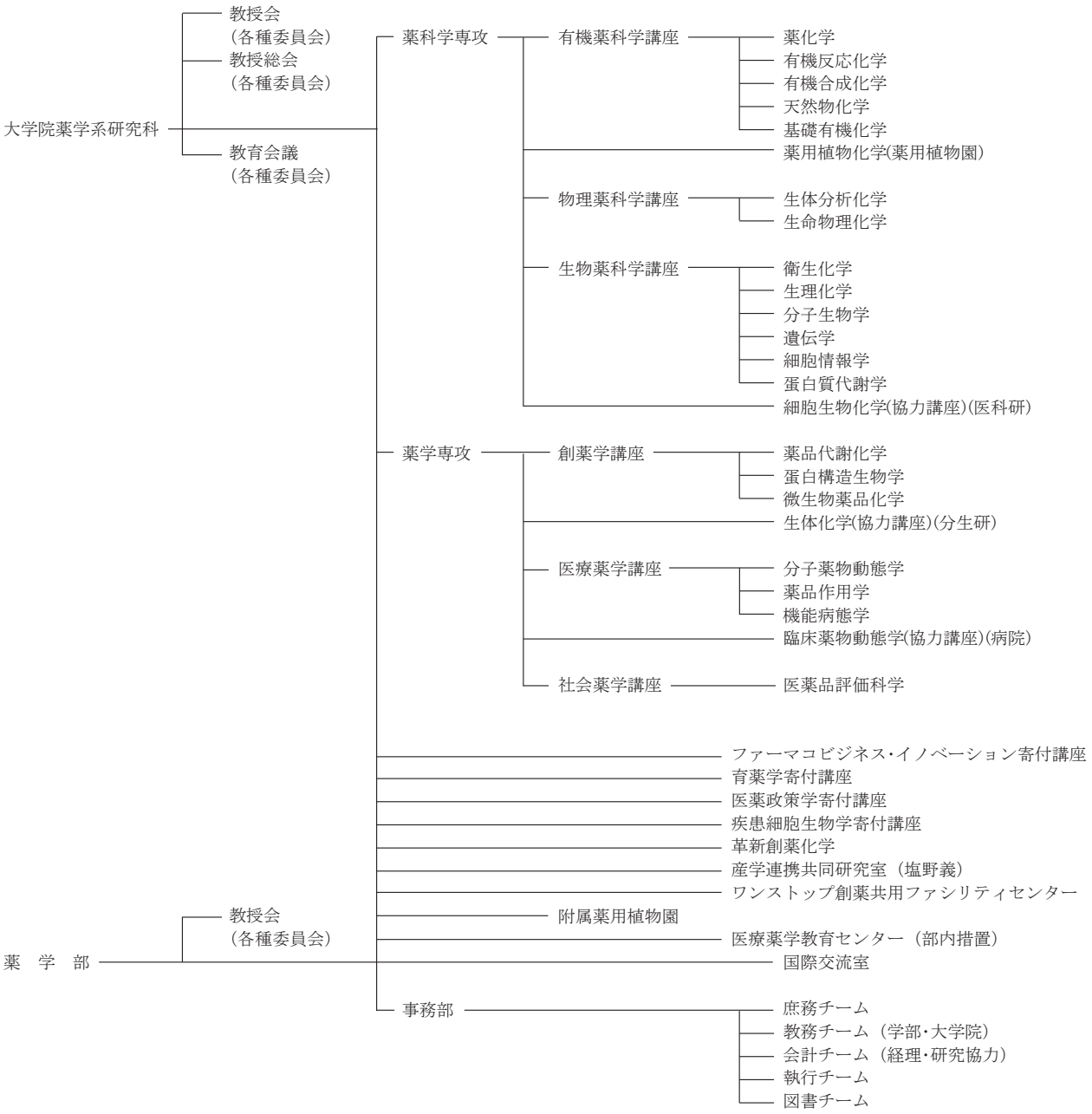
明治元年６月　神田和泉町に医学校が開設される。
６年７月　医学校に予科２年、本科３年の製薬学科が新設される。
７年４月　医学校は東京医学校と改称される。
９年12月　東京医学校は本郷新校舎に移転する。
10年４月　東京大学創立に伴い医学部製薬学科に改組される。
19年３月　学制改革に際し、帝国大学医科大学と改称、製薬学科は廃止される。
20年　帝国大学医科大学薬学科として復興される。
26年４月　薬学科に生薬学、衛生裁判化学、薬化学の３講座が制定される。
30年６月　東京帝国大学医科大学薬学科と改称。
39年　赤煉瓦造り薬学本館竣工。
40年４月　薬学科に薬品製造学講座が増設され４講座となる。
大正８年４月　学制改革により、東京帝国大学医学部薬学科に改組される。
12年　東館竣工。
14年　西館竣工。
昭和５年４月　薬学科に臓器薬品化学講座が増設され５講座となる。
17年４月　薬学科に薬品分析化学講座が増設され６講座となる。
22年10月　東京大学医学部薬学科と改称。
24年５月　国立学校設置法が公布され、新制度による東京大学医学部薬学科となる。
26年４月　薬学科に製剤学講座が増設され７講座となる。
28年４月　新制度による大学院として、化学系研究科薬学専門課程修士課程が設置される。
29年４月　薬学科に薬品作用学講座が増設され８講座となる。臓器薬品化学講座が生理化学講座と改称される。
30年４月　大学院化学系研究科に薬学専門課程博士課程が設置される。
33年４月　東京大学医学部薬学科が分離独立して薬学部が設置され、薬学科が置かれる。
34年４月　薬学部に製薬化学科が設置され、薬品製造化学講座が振替わる。
35年４月　製薬化学科に薬品製造工学講座が増設され２講座となる。この年記念講堂が竣工し寄贈される。
36年４月　製薬化学科に微生物薬品化学講座及び薬品物理化学講座が増設され４講座となる。
37年４月　製薬化学科に植物薬品化学講座が増設され５講座となる。
38年４月　大学院化学系研究科に製薬化学専門課程修士課程が設置される。
講座に関する省令により、衛生裁判化学講座が衛生化学・裁判化学講座に、生薬学講座が生薬学・植物化学講座に、植物薬品化学講座が薬品合成化学講座に整理改称される。
40年４月　大学院化学系研究科が改組され、大学院薬学系研究科が設置される。
大学院薬学系研究科製薬化学専門課程に博士課程が設置される。
41年４月　附属薬害研究施設が設置され薬害作用部門が設けられる。
42年４月　製薬化学科に薬品物理分析学講座が増設され６講座となる。
46年４月　附属薬害研究施設に生体異物研究部門が増設される。
48年４月　千葉市畑町に附属薬用植物園が設置される。
51年４月　附属薬害研究施設が廃止され、同施設部門の転換等により、大学院薬学系研究科に生命薬学専門課程修士課程が設置される。
生命薬学専門課程は、毒性薬理学講座（薬害作用部門転換）、生体異物・免疫化学講座（生体異物研究部門転換）、薬品代謝化学（新設）の３講座を基幹講座とし、薬学科の衛生化学・裁判化学講座及び製薬化学科の微生物薬品化学講座を協力講座として編成される。
53年４月　大学院薬学系研究科生命薬学専門課程に博士課程が設置される。
56年　昭和33年度に開始した薬学部本館建設工事の最終工事が完了し、本館全館が竣工する。
62年４月　大学院規則の改正により、「専門課程」が「専攻」と改称される。
平成２年４月　医薬分子設計学寄付講座（平成２年４月～同７年３月）が設置される。
４年４月　製薬化学科に薬品分子機能学講座が増設され７講座となる。
４年10月　機能病態学寄付講座（平成４年10月～同９年９月）が設置される。
６年３月　南館竣工。
６年６月　大学院薬学系研究科生命薬学専攻に相関医薬化学講座が増設され４講座となる。
８年５月　薬学科、製薬化学科を薬学科１学科に、既存の14小講座を医薬化学講座、生物有機化学講座、生体分子機能学講座、細胞生化学講座、医療薬学講座の５大講座に改組し、医療薬学講座に臨床薬学専門分野を増設した。
９年４月　大学院重点化により、分子薬学専攻・機能薬学専攻・生命薬学専攻の３専攻に改組した。
13年４月　創薬理論科学寄付講座（平成13年４月～同18年３月）が設置される。
医薬経済学寄付講座（平成13年４月～同19年３月）が設置される。
14年９月　ファーマコビジネス・イノベーション寄付講座（平成14年９月～同19年８月）が設置される。(平成24年９月更新)
15年４月　分子薬学専攻に創薬科学連携客員講座が新設された。
16年３月　薬学系総合研究棟が竣工。
16年４月　総長裁量により生命薬学専攻に医薬品評価科学講座が新設された。
16年　企業との共同研究に基づき、産学連携共同研究室が設置される。
16年10月　医薬品情報学寄付講座（平成16年10月～同21年９月）が設置される。(平成21年10月更新)
18年２月　薬学系総合研究棟Ⅱ期竣工。
18年４月　学校教育法、薬剤師法の改正により、薬科学科（４年制）と薬学科（６年制）の２学科となる。
18年４月　医薬政策学（東和薬品）寄付講座（平成18年４月～同23年３月）が設置される。(平成23年４月更新)
19年４月　アステラス創薬理論科学寄付講座（平成19年４月～同24年３月）が設置される。
20年４月　大学院に統合薬学専攻が設置され、4専攻に改組した。
22年３月　先端創薬棟が竣工。
22年４月　大学院修士課程に既存の４専攻を統合して薬科学専攻が設置される。
23年４月　医薬政策学寄付講座(平成23年４月～同27年３月)が名称変更し、引き続き設置される(平成27年４月期間延長)
24年４月　大学院博士後期課程(修業年限３年)に既存の４専攻を統合して薬科学専攻が設置される。
薬学博士課程(修業年限４年)薬学専攻が設置される。
24年６月　医療薬学高度教育開発センターが設置される。
24年10月　疾患細胞生物学寄附講座(平成24年10月～同29年９月)が設置される。
25年10月　文部科学省「先端研究基盤共用・プラットフォーム形成事業」の支援の下、ワンストップ創薬共用ファシリティセンターが新設された。
26年４月　医療薬学教育センターと改称される。
27年４月　医薬品情報学寄付講座が育薬学寄付講座(平成27年４月～同32年３月)に名称変更し、設置される。

2．組　織

1）名称及び所在地

名　　称	所　　在　　地	電話番号
大学院薬学系研究科・薬学部	〒 113-0033　文京区本郷７丁目３番１号	03-5841-4702
大学院薬学系研究科附属薬用植物園	〒 262-0018　千葉市花見川区畑町1479番地	043-273-7413

2）組　　織



3．教職員　（平成27年７月１日現在）

1）役　職　員

研究科長・学部長（評議員）	嶋　田　一　夫	附属薬用植物園長	嶋　田　一　夫
副　研　究　科　長	三　浦　正　幸	事　　務　　長	遠　藤　勝　之
教育研究評議員	一　條　秀　憲		

2）教職員数

教員									研究員			一般職員			合計
												一般職（一）		小計	
教授	准教授	講師	助教	特任教授	特任准教授	特任講師	特任助教	小計	特任研究員	その他の研究者	小計	事務職員	技術職員		
19	8	11	29	3	4	3	18	95	25	15	40	20	1	21	156

3）専門分野別教員一覧

専攻名	講座名	専門分野（教室名）	教授	准教授	講師	助教	
薬科学	有機薬科学	薬化学	大和田智彦		尾谷　優子		
		有機反応化学	井上　将行		占部　大介	長友　優典	伊藤　寛晃
		有機合成化学	金井　　求			生長幸之助 清水　洋平 山次　健三	
		天然物化学	阿部　郁朗	岡田　正弘		淡川　孝義※ 松田　侑大	森　　貴裕
		基礎有機化学	内山　真伸		宮本　和範	平野　圭一 斉藤　竜男	
		薬用植物化学 （薬用植物園）		折原　　裕			
	物理薬科学	生体分析化学	船津　高志		角田　　誠	岡部　弘基 飯塚　　怜	
		生命物理化学	嶋田　一夫			上田　卓見 西田　紀貴 内山　聖一	幸福　　裕
	生物薬科学	衛生化学	新井　洋由		河野　　望	今江理恵子	向井康治朗 大場　陽介
		生理化学	堅田　利明		福山　征光	齋藤　康太	大畑　慎也
		分子生物学	後藤由季子			岸　　雄介 古舘　昌平	岡崎　朋彦 樋口麻衣子
		遺伝学	三浦　正幸	千原　崇裕		山口　良文	古藤　日子 勝山　朋紀
		細胞情報学	一條　秀憲		名黒　　功	関根　史織	服部　一輝 本間　謙吾
		蛋白質代謝学	村田　茂穂	八代田英樹		濱崎　　純 平山尚志郎	
		（寄）疾患細胞生物学	（兼）新井　洋由	田口　友彦			
薬　学	創薬学	薬品代謝化学	浦野　泰照	花岡健二郎		寺井　琢也 上野　　匡	
		蛋白構造生物学	清水　敏之		大戸　梅治	藤間　祥子	
		微生物薬品化学	関水　和久	垣内　　力		濱本　　洋 松本　靖彦	
	医療薬学	分子薬物動態学	楠原　洋之		前田　和哉	林　　久允	水野　忠快
		薬品作用学	池谷　裕二	小山　隆太		佐々木拓哉	
		機能病態学	富田　泰輔			堀　由起子 高鳥　　翔	
		（寄）育薬学	澤田　康文	（兼）堀　　里子	三木　晶子	佐藤　宏樹	
	社会薬学	医薬品評価科学	（客）藤原　康弘	小野　俊介	（兼）山本　武人		
		（寄）医薬政策学	（兼）嶋田　一夫 （客）津谷喜一郎			五十嵐　中	
		（寄）ﾌｧｰﾏﾋﾞｼﾞﾈｽ・ｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ	木村　廣道		桝田　祥子	櫻木　　誠	
リーディングプログラム				加藤　　大			
産学連携共同研究室（塩野義）							
革新創薬化学			（兼）一條　秀憲			小松　　徹	
医療薬学教育センター			三田　智文 （兼）新井　洋由 （兼）澤田　康文 （兼）金井　　求 （兼）鈴木　洋史		山本　武人		
ワンストップ創薬共用ファシリティセンター			（兼）一條　秀憲	東　　伸昭			
未来医療研究人材養成拠点形成事業					清水　央子	木村　紘子	
国際交流室					菊池美紀子		

※は研修出向者

4．学　生

1）定員及び現員

（平成27年５月１日現在）

区分	学部学生				
	３年	４年	５年	６年	合計
定員	80	80	8	8	176
現員	86 (21)	87 (19)	7 (2)	8 (3)	188 (45)

（　）内は女子で内数

区分	大学院学生												合計
	修士課程			博士後期課程				薬学博士課程					
	１年	２年	計	１年	２年	３年	計	１年	２年	３年	４年	計	
定員	100	100	200	50	50	43	143	10	10	10	10	40	383
現員	87 (20)	108 (23)	195 (43)	43 (9)	59 (9)	65 (11)	167 (29)	5 (2)	2 (0)	3 (0)	4 (2)	14 (4)	376 (76)

2）外国人留学生

（平成27年５月１日現在）

区分／国籍（地域）	学部	大学院			合計
		修士	博士	研究生	
バングラデシュ				1(1)	1(1)
インドネシア	1(1)		1		2(1)
フィリピン			1		1
タイ			1	1(1)	2(1)
韓国		1(1)	1		2(1)
中国	3	12(1)	11(6)	3	29(7)
台湾		1	1		2
ナイジェリア		1(1)			1(1)
メキシコ		1(1)			1(1)
スリランカ				1(1)	1(1)
スウェーデン				1	1
合計	4(1)	16(4)	16(6)	7(3)	43(14)

（　）内は国費留学生の内数

3）研究生等入学・受入れ状況

年度／区分	23	24	25	26	27
学部研究生	2	2	2	2	1
大学院研究生	10	11	8	3	9
学部聴講生	1				2
小計	13	13	10	5	12
受託研究員	3	5	9	10	10
合計	16	18	19	15	22

各年度５月１日現在在籍者数

4）就職・進学の状況

区分	学部卒業者								
年度	22	23		24		25		26	
		薬科学科	薬学科	薬科学科	薬学科	薬科学科	薬学科	薬科学科	薬学科
製薬会社			2	1	2		1		1
化学工業系会社									1
金融・保険・商事会社	1			2	2				
教育・官公庁・研究所等			1		1	1	1		1
その他							5		4
小計（就職者数）	1	0	3	3	5	1	7	0	7
進学(修士・薬学博士課程)	69	80	4	71	3	72	1	70	2
研究生・他学部進学等	6			4		1		1	1
海外留学	1	2							
その他	1	2				2		1	
合計（卒業生）	78	84	7	78	8	76	8	72	10

区分	修士課程修了者					博士後期課程修了者				
年度	22	23	24	25	26	22	23	24	25	26
製薬会社	13	21	16	20	14	13	12	20	20	16
化学工業系会社	10	8	9	8	4	7	10	6	3	4
金融・保険・商事会社	1	1	5	3	3					
教育・官公庁・研究所等	7	7	4	6	11	17	31	25	13	15
その他	6	4	13	5	18		2	5	5	1
小計（就職者数）	37	41	47	42	50	37	55	56	41	36
進学（博士後期課程）	44	37	48	48	40					
進学（他研究科修士・他学部進学等）	6	2	2	4	2					
海外留学			1	1						
日本学術振興会研究員等						3			6	3
その他	3	2	1	4	1	3	2		4	
修了者数	90	82	99	99	93	43	57	56	51	39

5）博士学位授与数

区分＼年度	22	23	24	25	26	累計
課程博士	43	59	56	51	39	1,676
論文博士	15	23	18	15	14	1,509

※論文博士（旧制）授与数：571

６）奨学生（平成26年度）

①　日本学生支援機構

区分＼項目＼学年	第一種				第二種				合計	在学生数(10月1日現在)	在学生に対する率
	３年	４年	５年	６年	３年	４年	５年	６年			
学部奨学生数	11	11	1	2	8	8		1	42	184	23%

区分	学年＼課程	１年	２年	３年	合計	在学生数(10月1日現在)	在学生に対する率
大学院奨学生数	修士	40	33	―	73	198	37%
	博士後期・薬学博士	9	9	5	23	172	13%

②　その他奨学生

種類＼区分	学部学生				大学院学生		合計
	３年	４年	５年	６年	修士	博士後期	
安藤記念奨学財団奨学金					1		1
井上育英会		2					2
岩城留学生奨学会					1		1
岩垂奨学会					3		3
上原記念生命科学財団						1	1
学習奨励費（ＪＡＳＳＯ）					2		2
樫山奨学財団		1					1
向上会	1						1
小原白梅育英基金					1		1
小林国際奨学財団奨学生（一般奨学金）		1					1
〃　（特別研究奨励金）					1		1
佐藤奨学会				2			2
佐藤陽国際奨学財団奨学生（秋募集）						1	1
尚志社					1		1
新日本奨学会					1		1
鈴木万平記念薬学奨学基金	1						1
竹中育英会					1		1
とうきゅう留学生奨学財団奨学金						1	1
東京大学フェローシップ					3	2	5
東京大学外国人留学生支援基金奨学生					1		1
徳州会奨学金		1					1
中村積善会					1		1
中山報恩会					1		1
野間文化財団奨学金					1		1
ヒロセ国際奨学財団外国人留学生奨学生		2			2		4
本庄国際奨学財団奨学金						2	2
丸和育英会				1			1
森下育英会		1					1
吉田育英会マスター21・ドクター21					2	2	4
合計	2	8	0	3	23	9	45

5．施設設備等

1）土　　地　14,677㎡

本郷地区　8,554㎡　校舎、附属薬用植物園見本園

千葉地区　6,123㎡　附属薬用植物園

2）建　　物　27,748㎡（延総面積）

（本郷地区）

区分		構造	建築年	用途	延床面積(㎡)
教室及び実験室	本館	RC－6 地下1屋階付	昭和32－56年	校舎実験研究室等	9,053
	総合研究棟	RC－10 地下1屋階付	平成16年	〃	11,453
	南館	RC－6 地下2屋階付	平成6年	〃	4,734
	資料館	RC－5 (含･渡り廊下)	平成8年	図書館	1,263
教育研究棟		S－2 (含･渡り廊下)	平成14年	実験研究室等	260
先端創薬棟		R－3	平成21年	実験研究室等	337
薬品倉庫		R－1	平成5年、10年	倉庫	133
合計					27,233

（千葉地区）

管理室	W－1	昭和18	管理室	69
実験及び実習室	CB－1	昭和48	実験実習室等	151
温室（第二）	R	昭和50 (平成12年建替)	温室	68
〃（第一）	R－1	昭和57	〃	214
ボイラー室	CB－1	昭和52	ボイラー室	3
機械室	CB－1	昭和57	機械室	10
合計				515

3）設 備 等

① 図書及び学術雑誌（平成27年３月31日現在）

（単位：図書＝冊、学術雑誌＝種）

図書			学術雑誌		
和 書	洋 書	小 計	和 書	洋 書	小 計
11,658	32,982	44,640	379	464	843

② 標 本

区 分	現有
薬用植物学	30,600
生 薬 学	17,200
解剖生理学	0
そ の 他	0
計	47,800

資料館、総合研究棟

講 堂

学生実習室

6．財　政

1．支出決算額

（単位：千円）

年度	人件費（A）	物件費（B）				
		運営費交付金	施設整備費	受託研究費	受託研究員費	小　計
22	805, 127	286, 754	0	1, 318, 113	3, 518	1, 608, 385
23	823, 842	298, 097	0	1, 175, 937	1, 624	1, 475, 658
24	781, 087	306, 764	0	1, 110, 445	4, 871	1, 422, 080
25	765, 449	321, 087	0	1, 053, 571	5, 953	1, 380, 611
26	789, 831	408, 318	0	925, 567	5, 011	1, 338, 896

（単位：千円）

年度	科学研究費補助金（C）	寄付金（D）	
22	（文科省）　817, 686 （厚労省）　60, 498	112件	335, 245
23	（文科省）1, 035, 900 （厚労省）　51, 906	84件	220, 952
24	（文科省）　968, 565 （厚労省）　33, 900	77件	211, 874
25	（文科省）1, 006, 939 （厚労省）　25, 760	72件	228, 198
26	（文科省）　946, 462 （厚労省）　2, 450	68件	147, 715

（単位：千円）

総合計（A＋B＋C＋D）
３，６２６，９４１
３，６０８，２５８
３，４１７，５０６
３，４０６，９５７
３，２２５，３５４

7．専門分野別主要研究テーマ

薬　科　学　専　攻

有機薬科学講座

専　門　分　野	主　　要　　研　　究　　テ　　ー　　マ
薬　化　学　教　室	1．特異な構造特性を持つ分子の合成と生物活性への応用：アミドの化学・水中で安定ならせん分子の合成・機能性 NO ドナーの合成 2．陽イオン中間体（ジカチオン）の化学：多官能基化された芳香族化合物の合成への応用 3．特徴ある機能（生物活性等）を持つ有機分子の設計・合成・構造の研究：膜タンパク質の機能をコントロールする分子のデザイン・合成と創薬インパクト 4．理論計算を活用する構造化学・反応機構の解析・機能分子や生物活性物質の理論的な構造設計と機能予測・分子の動的挙動の解明
有機反応化学教室	1．天然物全合成効率化のための方法論開発 炭素骨格の直接官能基化、対称性を利用した炭素骨格構築 2．巨大複雑天然物の全合成 多縮環・多官能基化天然物や、環状ペプチドおよびイオンチャネル形成巨大ペプチドの全合成 3．天然物を基盤とした新機能創造 天然物の構造と機能をモチーフとした生体機能の新しい制御法開発 4．選択的酵素阻害剤の探索 有効な治療法がない原虫感染症に対する化学療法剤の分子設計と合成
有機合成化学教室	1．複雑分子の全合成を革新しうる触媒反応開発 a．redoxにカップルした触媒的結合構築 b．保護基フリー触媒的分子構築 2．触媒開発を基盤するClean, Robust, Conciseな分子合成：収束的触媒反応 3．触媒開発を基盤とした新エネルギー社会への貢献：H_2 や O_2 の触媒的活性化 4．触媒反応開発を基盤とした新コンセプトからの創薬：抗ウイルス、感染症、免疫抑制剤、癌、oscillation、触媒医療
天然物化学教室	1．天然物の生合成（ゲノムマイニング、生合成工学） 2．酵素と生体触媒（構造機能解析、酵素工学、反応機構） 3．生物活性物質の探索（単離構造決定、合成、作用機序）
基礎有機化学教室	1．物質科学・生命科学を支援する高度分子変換法の開発（反応化学・合成化学） 2．未踏物質科学、未知生命科学、未来合成化学に貢献する周期表横断型元素化学（元素化学） 3．合成化学・分光学・計算化学を基盤とした物質創製（物理有機化学・分光学・理論計算）

物理薬科学講座

専　門　分　野	主　要　研　究　テ　ー　マ
生体分析化学教室	1．分子シャペロンや分子モーターなどの生体分子機械の動作原理の研究 2．細胞内mRNAのプロセシングと輸送の１分子蛍光イメージング 3．生体分子間相互作用を解析するためのマイクロ・ナノデバイスの開発
生命物理化学教室	1．核磁気共鳴法を用いた、生体内ネットワークの構造生物学的研究 2．膜蛋白質・リガンド相互作用の構造生物学的研究 3．生体分子の構造と機能に関する物理化学的研究

生物薬科学講座

専　門　分　野	主　要　研　究　テ　ー　マ
衛生化学教室	1．生体膜脂質酸環境の制御機構とその意義の解明 2．新規脂質性メディエーターの探索と新規生理機能の解明 3．炎症の収束に関わる細胞の同定とその機能解析 4．線虫に（*C.elelgans*）を用いた脂質機能の遺伝学的解析 5．細胞内小胞輸送における脂質機能の解明
生理化学教室	創薬標的としての細胞間、細胞内シグナル伝達機構の解析 特に、Gタンパク質が介在する細胞の受容・応答機構を中心にして 1．ゲノム情報を活かした新しいGタンパク質の同定と機能解析 2．Gタンパク質によるエンドサイトーシス・エキソサイトーシスの制御機構 3．Gタンパク質を介した小胞体からのコラーゲン分泌機構 4．Gタンパク質を介した個体レベルでの栄養感知機構
分子生物学教室	1．脳発生における神経幹細胞の運命制御 ・時間・空間情報依存的な幹細胞の増殖・分化制御メカニズム ・成体神経幹細胞の形成および維持メカニズム 2．ニューロン発達におけるクロマチンレベルの運命制御 3．細胞運動性・がん浸潤性を制御するシグナル伝達 4．ウイルス応答性を制御するシグナル伝達
遺伝学教室	1．遺伝学を用いた細胞死機構とその生体機能の解明 2．ストレス応答と個体の恒常性維持機構 3．組織細胞定足数の制御機構 4．発生の代謝制御機構 5．機能的な神経回路の形成・維持を司る分子基盤 6．冬眠可能状態の制御機構 7．社会性昆虫アリの環境に応じた生存戦略機構の解明
細胞情報学教室	1．細胞内シグナル伝達 2．ストレス応答と細胞死の分子機構 3．ASK ファミリーシグナルの破綻と疾患（癌、免疫、神経、血圧） 4．酸化ストレス、小胞体ストレス、浸透圧ストレス、ミトコンドリアストレス

専　門　分　野	主　　要　　研　　究　　テ　　ー　　マ
蛋白質代謝学教室	1．超分子タンパク質分解酵素プロテアソームの動作機構の解明 2．プロテアソーム機能異常と疾患（がん、炎症、老化、神経変性） 3．胸腺特異的プロテアソームによるT細胞選択機構の解明 4．ユビキチンシステムによる異常タンパク質除去機構の解明

薬　学　専　攻

創薬学講座

専　門　分　野	主　　要　　研　　究　　テ　　ー　　マ
薬品代謝化学教室	1．蛍光・増感・ケージドプローブの論理的デザイン法の確立を目指した光物理有機化学研究 2．新規光機能性プローブの開発とその細胞生命現象解析への応用 3．動物体内での *in vivo* 病態可視化･動的制御を実現する光機能性プローブ・MRIプローブの開発 4．微小がんの術中迅速可視化・治療を実現する光機能性プローブの開発と新医療技術創成 5．蛍光プローブを活用した創薬及び創薬標的の探索に関する研究
蛋白構造生物学教室	1．X線結晶構造解析法による核内タンパク質や相同組換え、自然免疫に関わるタンパク質の構造生物学的研究 2．医学薬学的に重要なタンパク質の構造生物学的研究 3．シンクロトロン放射光の利用など、物質の三次元構造の新しい研究法、方法と理論の開発
微生物薬品化学教室	1．感染症を引き起こす細菌の増殖・病原性・薬剤耐性化機構の解明 2．カイコの感染モデルを用いた、感染症治療薬の探索に関する研究 3．カイコの糖尿病モデルに関する研究 4．カイコを用いた自然免疫の分子機構に関する研究

医療薬学講座

専　門　分　野	主　　要　　研　　究　　テ　　ー　　マ
分子薬物動態学教室	薬物の薬効、安全性を支配する要因と機構の解明 －薬物の生体内動態（ファーマコキネティックス）及び薬効発現の速度論、分子論－ 1．薬物の体内動態及び薬効の試験管レベルから個体レベルへの再構築：遺伝子多型による体内動態の個体差および薬物間相互作用の予測 2．薬物の胆汁・尿中排泄機構および血液脳関門透過機構の解析：遺伝子改変動物、遺伝子発現細胞の利用 3．トランスポーターの膜局在制御機構の解明 4．トランスポーター利用によるドラッグデリバリーシステム（ＤＤＳ）の開発 5．薬物による組織毒性発現機構の解明（小胞体ストレス、ミトコンドリア毒性、活性代謝物の関与など） 6．トランスポーターの転写制御機構・エピジェネティック制御機構の解析

専　門　分　野	主　　要　　研　　究　　テ　　ー　　マ
薬 品 作 用 学 教 室	1．ストレス連関脳神経疾患の解明と治療薬開発：扁桃体－海馬体相互調節、末梢性調整 2．神経回路システムの演算機構と高次可塑性の探求：自発活動と入出力相関、大脳皮質の回路情報と条件付学習、神経－グリア－血管相互作用、発達期脳回路の同期波 3．脳疾患における神経回路形成機構の解明 4．神経細胞集団による記憶処理機構の再活性化：記憶の各段階における情報処理と神経回路
機 能 病 態 学 教 室	1．γセクレターゼによる膜内配列切断システムの理解 2．アルツハイマー病原因物質Aβ代謝メカニズムとその制御の研究 3．アルツハイマー病リスク因子がもたらす分子病態の解明 4．細胞内小胞輸送の破綻と疾患の解析 5．神経細胞シナプス接着分子の代謝メカニズムと機能の解明

社会薬学講座

専　門　分　野	主　　要　　研　　究　　テ　　ー　　マ
医 薬 品 評 価 科 学 教 室	1．新医薬品研究開発の効率の向上に関する研究 2．医薬品の有効性・安全性評価の方法論に関する研究 3．社会にとって望ましい医薬品関連規制のあり方に関する研究

附属施設

専　門　分　野	主　　要　　研　　究　　テ　　ー　　マ
附 属 薬 用 植 物 園	1．薬用植物の組織培養と有用二次代謝産物の生産 2．植物由来生物活性物質の化学と生合成

寄付講座

専　門　分　野	主　　要　　研　　究　　テ　　ー　　マ
ファーマコビジネス・ イノベーション	1．日本の医薬品・ライフサイエンス産業研究 ①　グローバル経営環境変化と産業構造再編成、企業買収・合併の研究 ②　創薬研究・臨床試験における経営課題の研究 2．日本のヘルスケア産業研究 ①　医療機関、医療関連サービス産業の経営課題の研究 ②　予防医療、健康産業の研究 3．ライフサイエンス、ヘルスケア領域における産学連携と新産業創生の研究 ①　トランスレーショナルリサーチの研究 ②　ベンチャー企業、起業の研究 ③　ベンチャーキャピタルの研究
育　　薬　　学	1．医薬品ライフタイムマネジメントの推進 ・医薬品情報の収集、評価、解析、提供に関する方法論の開発と実践 ・医薬品情報の規格化・標準化・電子化及びその応用 ・薬物動態・動力学（PK/PD）に基づく医薬品の作用、副作用、相互作用の定量的予測 2．育薬・医療品適正使用に関する基礎と臨床の研究 ・生体擾乱因子が薬物の動態・作用に与える影響の定量的解明 ・薬物の胎児移行性及びその規定要因の解明
医　薬　政　策　学	1．ジェネリック医薬品の現状分析とヘルスシステムの中の合理的使用のあり方 2．生物学的製剤などの高価な医薬品の経済分析 3．ファーマコジェネティックスによる個別化医療 4．漢方・相補代替医療の現状分析と安全性・有効性・経済性の研究 5．医薬品ギャップの解消
疾 患 細 胞 生 物 学	1．物質の取り込みと分泌という二つの異なる方向性を持った輸送を制御するエンドソームの分子基盤 2．エンドソームの機能破綻により生じる細胞現象 3．エンドソームの機能破綻に起因する疾患 4．細胞内物質輸送を制御する低分子化合物の探索

8．配置図

1）本郷構内配置図

本部棟から見た資料館、総合研究棟、薬草園

薬草園（総合研究棟４F）

２）薬学部校舎及び諸施設配置図

下山順一郎先生

レオポルト・ミュルレル氏

薬学部本館正面玄関

薬学部本館及び薬学系総合研究棟
（医学部附属病院から望む。）

9．附属薬用植物園

（〒262-0018　千葉市花見川区畑町1479番地　TEL. 043(273)7413　FAX. 043(273)0033）

薬用植物園は総武線新検見川駅から北方へ徒歩約20分、本学検見川総合運動場、旧農学生命科学研究科附属緑地植物実験所に隣接して設置されている。6,123㎡（1,855 坪、内借地 2,150㎡）の敷地には学生教育上重要な薬用植物の標本園が設けられている。また、系統保存や育種栽培研究、内外の薬用植物蒐集栽培、薬用植物成分の化学的、薬理的、生合成的、植物生理学的、生薬学的研究、薬用植物栽培管理上の諸問題等の研究を行うことを目的とし、温室、管理棟および実験棟が設けられている。

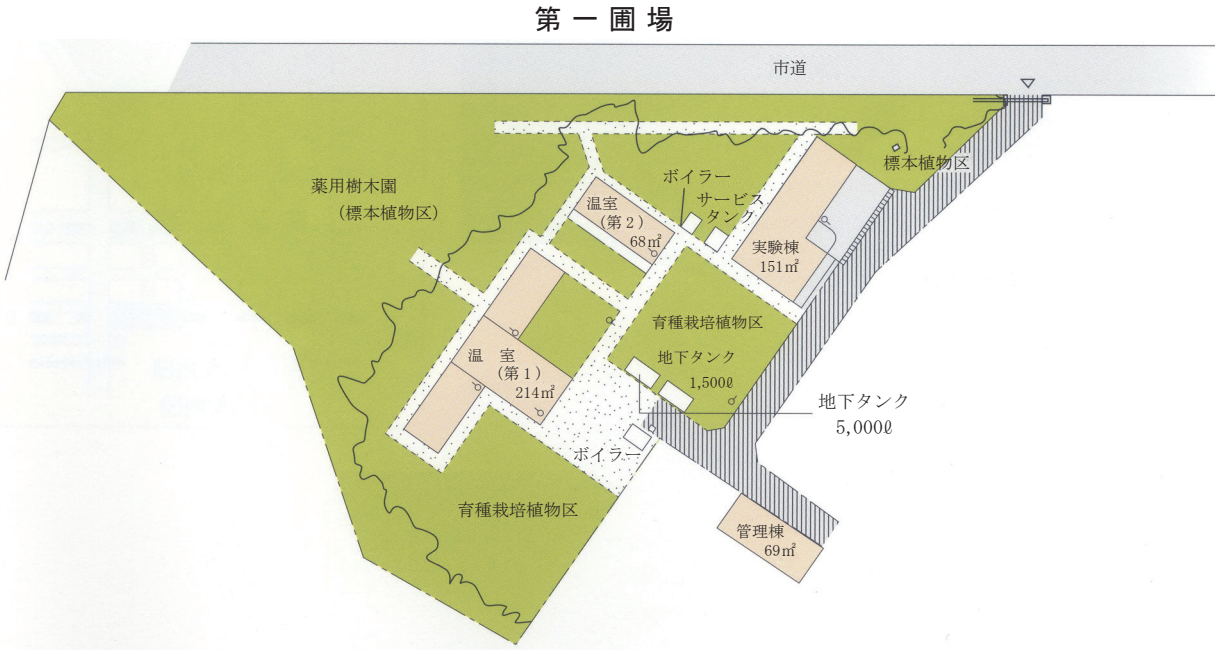
現在栽培されている植物は約 250 種におよぶ。毎年３年次生の夏学期に本植物園で実習が行われる。

昭和 57 年度からは学部構内に研究室（内線　24758）が置かれ、現在に至っている。

なお、本学総合研究博物館（本郷構内）の１階には薬学部門（内線　22842）があり主として生薬、薬用植物の標本が管理保存されている。

平成 16 年 10 月、総合研究棟のⅠ期工事の完成に伴い、学生が身近に薬用植物に触れることができるように、講堂屋上に屋上緑化の適用例としては初めての約100㎡の薬草園を設けた。自動灌水装置を備えた約 60cm の深さの軽量土壌の土地に数十種類の薬用植物が植栽されている。

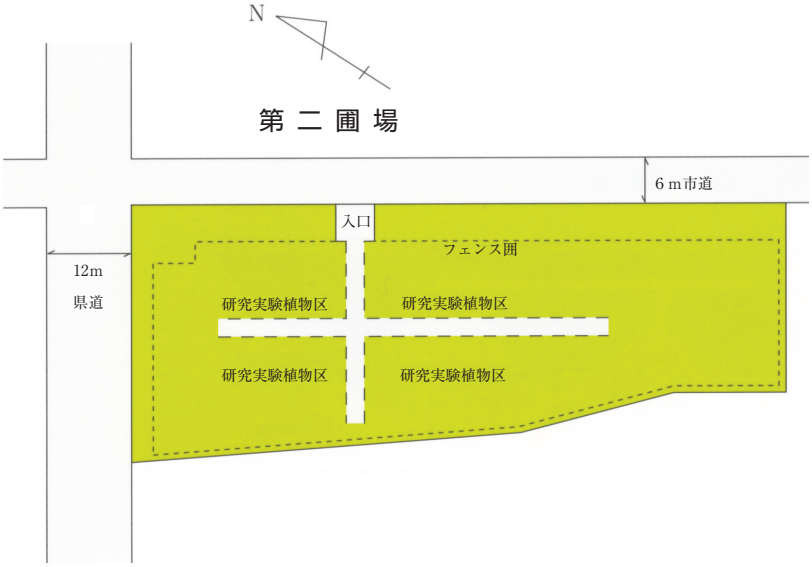
大学院薬学系研究科附属薬用植物園配置図



実験棟

第１温室

第２温室



東京大学大学院薬学系研究科・薬学部
〒113-0033　東京都文京区本郷７－３－１
TEL 03-5841-4702・4719
FAX 03-5841-4711
http://www.f.u-tokyo.ac.jp/